

庭からの旅

庭への旅

稲田の風景

庭の中の田んぼ

トンネルをぬけると深い溪谷を斜めに横切る鉄橋を渡って、やがて金色の穂をなびかせる田の間をかけぬけた機関車は、静かにホームにすべりこむ。あたりの家々の畜舎の窓からは、牛や馬が草を食む様子がのぞいている。空き地では子供たちがキャッチボールに興じ、田畑の手入れを終えた大人たちはある者は一人で、ある者は連れ立って家路につく。

ある人が自分の掌の中に自由に風景を創造してよい、といわれた時、こんな稲田のある風景を思い浮かべない人は、おそらく日本にはあまりいないでしょう。それは、ある「なつかしさ」を見いだせることが風景の理想像として我々の心の中に植えつけられているからです。実はこの文章は現実の風景を叙したのではなく、ある鉄道模型のジオラマの道具だてを並べてみたものにすぎません。ホームを出た機関車は、再び田んぼを横切ると急勾配のカーブをかけあがって、さきほどのトンネルへと戻ってゆくことになるのです。卓上にまとめられたこの理想化された風景は、小さければ小さいほど、その感動を凝縮することになります。黄金色の田でなくても、刈り入れの終わった田んぼに稲叢が並び、畦の傍らにある柿の木がたわわに実を稔らせていたりするのも、収穫の豊かさを自分の掌の中に忍ばせているところに、本来の意味があるのです。

さて、そう考えると、庭園というのも一つのジオラマに他なりません。我が国には昔から盆栽という最も洗練された手本がありますが、盆上の景でなくても、庭というある限られた敷地の中に山野を配し、理想の景をつくりだすことは、大きさこそ違え、鉄道模型のジオラマをつくることと同義の、ある「なつかしさ」をつくる道具だてであることには変わりはないのです。

東京の後樂園球場の隣りに、小石川後樂園という庭園があります。水戸藩の江戸中屋敷であったこの庭には、今では庭だけが残されていますが、現在の入り口から入るといちばん奥の川の流れる畔の窪地に、小さな田んぼが営まれています。

もともこの庭は、初代の水戸藩主である徳川頼房が造園を始めたものですが、水戸黄門として有名な水戸光圀がほぼ完成させたもの、といわれています。この田んぼは、実は光圀が継嗣の綱條の夫人たちに農民の労苦を教えるためにつくられ、実際に田植えや稲刈りが行われた、といわれています。深山幽谷の趣をだすために、わざわざ木の鬱蒼と茂ったこの地を選び、庭園ができる前にここにあった二つの寺を移転させたり、神田上水から分流を引き込んで池を築くなど大規模な工事によって作りあげられた日本最初の廻遊式庭園が、その中に稲田を営んでいるということは、それが当時の支配階級の夫人たちにとっては、すでに「なつかしいもの」として感じられていたということを示しています。「農民の労苦を教える」ためのこの田んぼが、先程の鉄道模型のジオラマのように、何か理想化され、抽象化された風景として我々の目に映るのはそのためでしょう。

稲田に限らず、庭園の中に庶民の営む生産設備を再現する、という道具立ては、他の庭園にもみることができます。現在、築地の卸売市場になっている一帯には江戸時代の後期、「浴恩園」という大庭園がありましたが、ここには田んぼの他に塩田までがつくられていました。さらに、現

在の新宿、戸山公園の場所にあった尾張徳川藩の下屋敷「戸山荘」の庭園には、御町屋とよばれる一角があり、これはなんと小田原の宿場町をそっくり模してつくられた一つの町だったのです。農民の労苦を知らなければならぬ支配階級の夫人は、もちろんヨーロッパにもいました。「浴恩園」の成立とちょうど同じころ、フランスでは王妃マリー・アントワネットがヴェルサイユのプチ・トリアノンの一角に水車小屋、乳搾りのための小屋、ハト小屋まで備えた「アモー」という一つの農村をつくり、側近とともに「シンプルな生活」を楽しんだ、といわれています。ここまできると、掌中に凝縮したはずの農村の風景が、再び肥大して等身大にまでなってしまうっており、何が大きくて何が小さいのかの感覚が失われてきてしまいます。

世界の田んぼ

庭を一步出て現実の田んぼを歩くと、理想化された抽象的な田んぼにはない、各々の田のもつ貌があります。水を引き込み、風を呼び込む季節ごとのやり方も、地方により、稲の品種により、そして時代により、様々です。

例えば、明治以前の田と、明治以後現代までの田の風景の中で、一番目立つ違いは何でしょうか。それはおそらく、稲の背の高さだと思われます。明治以後の田んぼでは、単位面積あたりの収量を増やすため、耕し方がそれまでより深くなり、また肥料を大量に与えるため、稲が倒れやすくなったのです。そのため、背が高く、大きな穂をつけるそれまでの品種にかわって、背が低く、穂も小さくて倒れにくいかわりに、根元から沢山の茎が枝わかれして穂を出す品種が選ばれていったのです。稔りの秋の風景も、時代や土地によって、ずいぶん違いのあるものなのです。

品種の違い以外にも、山や川といった田んぼを囲む風景の中にも変化は起こります。海に近い田をもつ人にとっては、川には堤がつきものですが、もちろん山あいの田の周囲に土手のある川はありません。また、堤の高さも上流の木伐採によって、急に高くなることがあります。こうした風景の変化は江戸時代の終わりから明治にかけて急激にすすんでいます。もちろん山の木を伐るのも、堤を築くのも人間ですから、東京の下町が工業化の波によって地盤沈下をおこし、堤防の陰に沈んでいったのとちょうど同じことが、過去、農村の風景の中にも起こっていたことになります。

世界に目をむけると、稲田の風景はもっと多様です。東南アジアのバングラデシュ、タイ、ミャンマー、ベトナムなどの大河流域には雨期の氾濫時には水位が五、六メートルにも達する地域があり、浮稲とよばれる茎の長さが六メートルにも達する稲が栽培されています。この稲の収穫風景は日本の常識からは考えられません。穂は乾期になって水が引き、一度倒れた茎から再び立ち上がって稔るのですが、その時でも水深は人の腰の上まであり、刈り取りは小舟の上から手で行うしかないので。バングラデシュでも灌漑施設の整備のためこの浮稲は急速に姿を消しているようですが、実は明治の中期まで日本でも岐阜県を流れる木曾川、長良川、揖斐川という三つの川が合流する付近には、この浮稲と同じような性質をもった稲が栽培されていました。その稲は頻りに襲う洪水に耐えられるように、水没すると茎をどんどん伸ばして水面の上に顔をだす性質をもっていたのです。

もしバングラデシュで、貴族が自らの庭に田を再現しようと考えたとしたら、田んぼは池の傍らではなく、池の中につくるのでしょうか。

畦の散歩道

秋になると、夏の間成長を休んでいた植物たちはいっせいに活動を再開して、穂をつけたり花を咲かせたりします。中でも初秋の田園風景を最も美しく彩るのがヒガンバナ＝曼珠沙華でしょう。夏の間前年の葉が枯れ落ちて地上に見える部分のなくなったこの植物は、秋になるとほんの数日のうちに花茎だけを数十センチにも伸ばしてその先端に真紅の花を開きます。

この花、果実をつけることがないので、当然タネで増えることができず、鱗茎という地下組織が分れることによって増えていきます。その増え方と繁殖力の強さのため、群生しているのが本来の姿であるうえ、花びらだけでなく、おしべやめしべまでが紅いので、地面がこの花に覆われた時の妖しさはひとときわです。

おそらく稲作が日本に伝わった頃に、ほぼ同時に中国からもたらされ、田の畦に植えられたものが広がったのでしょう。曼珠沙華はどうしても田んぼの風景と切り離して考えられない稔りの季節の風物詩です。中でも古くから稲作の発達した土地に多く、奈良盆地を電車で横切ると一円に見ることができますし、盆地南部の飛鳥村でも、特に聖徳太子の生誕地である橘寺の周辺は、古代の記憶ともあいまって最もこの花の妖しい魅力のきわだつところです。

関東周辺でも、埼玉県高麗に大群生地があります。ここも古くから朝鮮半島からの移民が田を開いた土地であり、高麗川の流れが湾曲する様子が近くの日和田山から眺めると巾着のように見えるところから巾着田と名づけられた田んぼの周辺の木立ちの下一面が、毎年九月になると真紅に染めあげられます。

秋雨が降ると、田舎でも街でも、軽い湿気を含んだやからかい空気が景色に淡いヴェールをかけてゆきます。そんな中で私がいちばんこの花を美しいと思うのは、皇居の周辺、特に北の丸公園の土手です。春には満開の花がはなやかに花見客をひきよせる桜の木の下で、五本、六本と身をよせあうようにして咲く曼珠沙華が遠く霧雨に烟っているさまは、近づけばそれが華やかであるだけに幻のように思われてきます。歴史の始まる以前に渡来し、今も続く稲田の風景の変遷のなかで、この花の彩りこそが、最もかわらぬ悲しさをたたえ続けているのかもしれない、そんな気がしてきます。

雨にぬれる巾着田の曼珠沙華

©ごろくと工房